

ついで言えば、社会的調和を連想させるようなことはなく、荒廃・風化といった特徴が強調されている。それは現実を超越した時間を示唆するに過ぎず、新しい封建主義社会の基礎という様相は全く見られない。

ゴシック建造物が感傷的なネルの死の背景として理想化され、グロテスクな要素を排除する傾向を持っているのは確かであるが、実際はここにもグロテスクな要素が垣間見られる。ただし、ネルの周囲で示されるグロテスクな要素は、クウィルプたちのグロテスクとは違った性格をもっている。ネルが引き寄せられていくゴシック建造物は、荒廃の過程を自らに刻み込んでいるがゆえに、生と死の両方を連想させる。このアンビヴァレントな状態はグロテスク芸術の重要な主題の一つである。その意味で、荒廃の物質的なイメージが強調されるとき、ゴシック建造物のグロテスクな様相が前景化されていると言える。そしてネル自身、幼く美しい姿をしている一方で、死の願望に囚われており、生と死を併せもった性格を備えているために、グロテスクなものへと近づいていくと言いうこともできるだろう。

確かにネルはグロテスクなものの潜在的脅威に怯えているが、その恐怖は死への恐怖ではなくて、生に対する不安である。ある意味で、ネルの存在は純粹すぎて、不浄に満ちた現実生活とは相容れない。そして彼女の現実生活に対する不安が、グロテスクなものとして表現されているという面もある。このように『骨董屋』には、ネル自身を含んだ生と死の間を揺れ動くグロテスクと彼女の脅威となる現実生活の変容としてのグロテスクという二種類のグロテスクが見られる。

また、現実生活のグロテスクな側面は、ネルにとっての脅威で

あるが、そこに身を置く人々にとっては、肉體性を謳歌する陽気な表現形式となり得る。この小説の半分、あるいはそれ以上は、ディケンズ初期の作品に特徴的な喜劇性に溢れており、ネルの去ったロンドンでは、喜劇的作中人物たちがグロテスクな姿と言動で陽気な世界を作り上げている。物語が進むにつれ、ネルの周囲には笑いと相容れない死を巡る言説が支配的になり、最後の村のゴシック建造物はその嚴肅な死を巡る言説の中で可能なグロテスクを表現する。しかしディケンズはそれに飽き足らず、ゴシックの喚起するグロテスクの陽気な可能性を、ネルと離れた世界で表現しているとも言えるかもしれない。

この小説におけるゴシック、そしてゴシックの重要な一要素のグロテスクの表現は、当時のゴシック観と同様に複雑で矛盾に満ちたものである。ゴシックは、ヴィクトリア朝の過去と現在、そして生と死に関する多様な意識が反映される場であり、ディケンズはゴシックの表現を通して、様々な効果を生み出したと考えられる。『骨董屋』は顕著に断片的な小説であるが、その断片性ゆえに、当時の様々な意識を、その矛盾を抱えたまま反映していると言えるのではないだろうか。

宋代家訓研究

——葉夢得の場合——

緒方賢一

大唐帝国（六一八―九〇七）の崩壊にともない没落した貴族に替わって、宋代（九六〇―一二七九）には士大夫という新たな階級が出現した。士大夫とは科挙に合格した官吏であり、試験とい

う世襲の余地のない制度の導入により宋代には新たな名家が次々に勃興した。しかし科挙によつてこそ得られたものとはいへ、一旦手にした地位と名誉を失いたくないと思うのは彼らとて同様であり、士大夫たちは自分がようやく得たものを子孫が維持・発展させてくれることを望んだ。この自分が築いた「立派な」家系を継いでもらわねばならないのである。しかし新しく起こった家には、歴史もなく、誇るべき家柄もない。そこで「家」をめぐる様々な書物が書かれることになる。第一に想起されるのは族譜であるが、そのほか家礼、家法、そして本発表で扱った家訓が作成された。これらの書物を通して、宋代の士大夫たちは自分の家が周の時代から続いた家系であるとの系譜を捏造して自らの出自の無根拠性を覆い隠そうとしたり、『論語』『易経』などの経書の言葉を引きつて自家独自の規範の権威付けを図ろうとしたのである。

家訓とは、「家を継いだ者(家長)が、子弟たちに一族の秩序維持及び繁栄と永続を願つて、祖先の遺徳を伝え、またその時点における家の内外の状況に関する訓戒を述べたもの」と一応定義できる。この家訓の特徴は、個々の家の実状に合わせて家族が守るべき内容が具体的に記述される点にある。

従来の家訓研究は主に史学の立場から行われることが多かった。例えば Patricia Buckley Ebbey 氏の『袁氏世範』研究や柳立言氏の『家訓筆録』研究などはその代表的なものといえる。彼らは家訓の分析を通じて、家族形態、家を取り巻く環境、経済状態などを明らかにしているが、家訓が提供する材料はそれだけに留まらない。

家訓は、日々生起する出来事に対する反応が素直に表現されている点で、当時の士大夫たちの日常における心のあり方を知るよ

い史料となる。「公」の場では決して出てこない「本音」がそこには露骨に表れる。また思想研究という点から言えば、家訓に書かれているのは、体系立って構築された哲学ではなく、単なる処世訓、養生訓である。そこからは「理」、「性」などの非日常的・形而上的概念に結晶化された形でなく、彼らが身を置いていた生活世界における倫理の感覚がそこから抽出できるのである。

今までの宋代思想史研究は、程子や朱子などの思想形成、その構造の解明から後世の影響を跡付けること(いわゆる頂点史観)、あるいは「理」や「性」といった語がいかなる変遷を経たかを辿ること(觀念史)に終始してきたと言つてよい。家訓を通じた日常道徳研究はそのどちらにも属さない形で宋代思想史を描けないかという試みの一端である。

宋代に書かれた家訓は多くあるが、本発表では葉夢得の家訓を取り上げ検討した。

葉夢得(一〇七七—一一四八)は北宋末から南宋初にかけて生きた士大夫である。二十歳で科挙に合格し、当時の宰相であった蔡京に諫言し認められて以後、翰林学士、戸部尚書、尚書左丞などを歴任。宦官や佞臣などに疎まれながらも志を貫き、功成り名遂げた人物である。知建康時には、自ら軍隊を率いて金軍を撃退し、高名な詩人でもある。

彼は『石林家訓』『石林治生家訓要略』という二つの家訓を残している。前者は十三条、後者は十五条と分量的にはそう大部なものではない。また内容の大体、例えば「孝行」「忠義」「勤勉」「修身」「節儉」などの徳目を称揚している点などは他の家訓と大差はない。諫言によつて出世した己れの体験からそれを強く勸

める言葉が見られるのも特徴の一つである。

思想的特徴としては、まず「人」・「家人」の捉え方が挙げられる。彼は人を「氣」の概念によって説明するが、人が誕生したときの同一性よりも成長後の差異性を強調し、それぞれの特性に見合った適切な落ち着き所があると述べる。これは現実の人々の多様性を受け入れる実践的態度の表れであると同時に、それらの人々がみな必ずしも教育によって理想的な人格を形成するわけではないことを了解している考え方である。儒教における最高の理想的人格は「聖人」であるが、彼は家人に対して「聖人を目指せ」とは言わない。「聖人」と普通の人との間に彼は断絶を見る。普通人の理想は「賢人」の顔回である。葉夢得の人間観はここに表れている。彼は人が絶対的存在になりうるとは考えていない。それは無理であるという。我々は所詮普通人なのだからその範囲で修養に励むべきであると言うのである。「至善（聖人）」ではなくとも不善には陥らない」といった言葉からは、目標をさらに下げて、せめて悪の方に傾かなければよしとする気持ちが見取れる。しかしそのような段階でさえもかなり困難なことであると感じていたのではないだろうか。自身「わたしは君子ではないが小人の憂いを持っていない」と自分もようやくそのような境地に至ったと述べていることからそれは窺える。「顔回を目指せ」という言葉と「不善さえ行わねばよし」という言葉が同居する家訓には、彼の子弟達に対する期待と諦念とが入り交じっている。

次に、かような子弟達をいかにして道徳実践に赴かせるのか。聖人に到達しうるほどの人材ならば、経書を読み自ずから自己修養に励むであろう。しかし多様かつ凡庸である彼らに多くを望むことはできない。例えば重要な徳目の一つである君主への「尽

忠」について見てみると、彼はストレートに君主への忠誠を語ることをしない。忠を尽くせば俸禄が得られるが、忠を十分に尽くさないや災害が我が身だけでなく親類にさえ及ぶと説く。このような俸禄や出世などの「利」をもって子弟達を道徳に向かわせるのが葉夢得の家訓の特徴である。しかしこの「利」による道徳への導きは実は道徳目標が達成されたらそれを捨て去ることができるとような便宜的な方法に留まるものではない。それは単なる目的のための手段ではない。彼にとって「利」のために道徳行為を働くことは何ら悪いことではないのである。葉夢得の中で、道徳実践と「利」とは不可分のものとして捉えられている。ここには現代の倫理学が問題とする合理主義・功利主義への疑念は寸分もない。

ただそれが許されるのは一つの条件下においてである。まず彼は利己主義的態度を否定する。少しでも私欲があれば神が見て天罰を下すという。ではその反対の聖人のような無私の利他主義的態度であればよいかというそれも否定する。己を捨て去って天下の利のために身をすり減らすのは墨子と同じだといっている。彼が「利」のための道徳行為を認めるのは唯一、「一家」に「利」をもたらず場合のみである。中国の道徳思想において通常基準となる「公―私」観念からはずれた、この「利家主義」こそ彼の日常道徳の立脚点なのである。